

ばん！と濁いた音が部屋に響き渡った。

広々とした部屋にはこの屋敷に代々受け継がれてきた調度が並ぶ。国内外から取り寄せられた貴重な品々が陳列され、壁はところどころを金で彩られている。

「ああ……っつ！」

豪華で厳格な雰囲気部屋の部屋に似つかわしくない嬌声——。

声を上げた少年は、全裸でベッド脇の床に四つん這いにさせられていた。大理石の床がひんやりと少年の膝を苛む。その尻の片側は今しがた主人に鞭打たれたために紅く色づきはじめていた。首には銀の枷が嵌められており、その鎖の端はベッドに腰かけた主人にしっかりと握られていた。

「お前というやつは！また漏らしおって」

歳は四十手前くらいだろうか。主人の男は貴族とは思えない下品な笑みで片側の口角を吊り上げ、少年の尻に再度鞭を振り下ろした。

ばん……っつ

先程よりも大きな音がして、少年は背を仰け反らせ全身ををわななかせた。音のわりに一回一回の痛みはそれほどでもない。しかし、何度も同じ場所を打たればやはりその部分が腫れてじんじんして、仕舞いには耐えられなくなるのが毎回のことであった。

「お前は奴隷失格だ！俺が罰を与えて躰けてやる！！」

尻を打たれる度、少年の艶の良い黒髪がさらりと揺れる。長い睫毛に覆われた美しい瞳から透明な雫を滴らせ、少年は成す術もなく冷たい床に細い手足をつき続けることしかできなかった。

が、その乱れはじめた息は既にある種の熱を帯び始めていた――。

主人の折檻はいつものことだ。

屋敷ではこの少年と似たような境遇の少年があと十人もいる。

皆容姿の端麗さから幼くして性玩具としてここに売られ、毎日主人に甚振(いたぶ)られながら過ごしている。

まるで動物のように常に裸で牢に繋がれ、一日に三度ある食事の全ては媚薬入りだ。にもかかわらず自慰は禁止され、排尿の回数さえ主人に指定されている。もしもその小さな雄茎の先端から主人が望まぬタイミングで何らかの液体を溢れさせようものなら、何であれそれは「お漏らし」扱いだった。

お漏らしした少年はすぐに折檻を受けることとなる。
丁度この少年のように一。

少年は朝からずっと排尿を我慢していた。
昨日就寝前の排尿の許可を得られず、それから一度もトイレに行っていないのだった。
トイレは主人の部屋の脇に備え付けられた個室で行わなければならない。それも毎回主人に見られながらだ。そんな屈辱的な状態でも、その機会が与えられないよりはまだましだった。

昨日は主人に別件で扱かれ、罰として就寝前の排尿を禁じられてしまったのだ。

明け方近くになり少年は脚をもじもじさせながら排尿の指示を待った。
この狭い牢の中で漏らしてしまえば誤魔化しようもない。

しかし意識を逸らそうとすればするほど尿意は強くなり、やがてはそれのことしか考えられなくなる。

「だめ……っ、」

少年は慌てて自身の前を手で押さえたが、それがいけなかった。
毎食の浅ましい薬の効果で敏感になったそこはただ触れただけの刺激をいとも簡単に快楽に変換した。

「あ……う、あ……っだめ……え、」

程なくして熱くなり芯を持ち始めたそこは次なる刺激を求めている。
じわり、と先のほうに透明な液が滲む。

いけないと思うのに、それを見れば見る程頭がぼうっとして何も考えられなくなる。

「あ、ああ……っ、う……っ、だめ……っ、だめえ……っつ、」

少年はそう言いながらも、右手が拙い手つきでそこを擦り始めるのを止められなかった。

秘めやかな、小さな水音が少年の耳を犯す。

こんなことをしたらまたお仕置きをされる。今度は昨日よりもっと酷いことをされるかもしれない。そう思うのに、先走り濡れたそこを擦れば擦る程快感は増して、あともう一回、もう一回だけと摩擦し続けるうちにとうとう歯止めがきかなくなる。

「だめ……っ、あ……っだめだめだめ……っつ、あ、ああっ！あああああ……っつっ！」

石の床に蟻を溢したような水溜まりができていく。

「う……っ、あ、ああ……っつ、」

とうとう少年は主人の指示なく精を吐き出してしまった。一体どんな仕打ちを受けるだろうかと想像するのも恐ろしい。しかし、悲劇はそれに留まらなかった。一時快感で忘却されていたかに見えた尿意が再び下腹部を圧迫し始める。

「い……いや……っあ、だめ……っつ、おもらし……っつ、だめ……え、」

腰をがくがくさせながら牢の柵にしがみつき、必死になって耐える。

「といれ……っ、といれ行かせて……くださ……っつ、おねが……っつ」

人のいない屋敷の地下に虚しく少年の声が反響する。牢の柵に股間を擦りつけるようにするも、この強い尿意が和らぐわけもない。

「ひう……っ、あ、あっ、あ……っ」

大きな瞳は涙で潤い、息は荒い。

淫猥にも腰をくねらせるような動きになってしまうが、構ってなどいられない。

ぞくん、ぞくんと何度も背筋に身震いしたくなるような感覚が駆け上る。

小さな男根の根元をいっそ手で押さえてしまいたかったが、先程の自慰でそこは敏感になりすぎていた。少しでも手で握り込めばたちまち奥にあるものが溢れてしまいそうで、怖い。

興奮した獣のように鼻からふーふーと息を吐き、がくがくと下半身を牢の柵に擦りつけることしかできなかった。

自分の呼吸で生じる振動ですら、今の少年にとっては命取りだ。

荒くなる息をなんとか自制し、脚の間の筋肉に力を込める。

しかし、ついにその時は訪れた。

「あっ、」

腹に意識を集中する間もなく、あっけなくそこは決壊した。

「や……っ、いや…あ…！だ…め…え、おもらし……っ、やだ……っっ」

少年は頬をぼろぼろと涙で濡らしながら放尿した。

生暖かい液体が幾重にもわかれ少年の大腿部を伝い落ちる。

止めようと思うのに、脚の間と腹に全く力が入らなくなっている。

「ああ…っ、う…っつ、あ……っ、」

尿をやっと出せた快感に、腰ががくんがくんと何度も揺れる。

足元にできたぬるい水溜まりはぴちゃぴちゃと音を立てながら、どんどん大きくなっていったー。

「あああ…あ…っつ」

三度も同じ側の臀部を鞭打たれ、少年は下半身をがくつかせながら耐えた。白かった片尻はとっくに色が変わっている。

「反省しているのか！？え？今朝から何回お漏らした？！言ってみろ！！」

主人の歓喜とも怒号ともつかぬ声が次の鞭とともに少年を打つ。打たれる度、少年の首から下がる鎖がじゃらじゃらと音を立てた。

「ああ……っ！う…、に…、二、回…です……」

震えながら少年は目に涙を溜めて答えた。人形のように美しい小さな顔がすっかり紅潮している。

そして、臀部に痛みを感じながらも少年の幼い茎部は徐々に硬度を持ち始めていた。年中強制的に与えられる媚薬のせいで少年の躰は僅かな刺激にも敏感に反応する。例え痛覚であってもそれは同じことだった。

「そうだ！お前は今日二回も漏らした。一回につき百回…、二百回謝らないとお仕置きは終わらんぞ！謝れ！！反省して、謝るんだ！！！」

ぱん！ぱん！！と続けざまに鞭打たれ、少年は臀部から忍び寄る快感と痛みに無意識に腰を跳ねさせた。

「あ……っつご…、ごめ…なさい…、ご主人さま…、あっ……っ！！」

溢れた雫が少年の紅く色づいた頬を伝うも、主人は容赦などしない。むしろ益々嬉々とした様子にも見える表情で、少年の左右の尻を交互に鞭打ち始めるのだった。

「ほらほら！さっさと謝らねえと尻が大変なことになるぞ！」

ぱん！ぱん！！と大きな音が連続で鳴り響く。

無意識に逃げようとする少年の腰は主人の手に捕らえられ、なおも無慈悲に鞭はとぶ。

「ひ…いっ、あ…っ、ごめ…っ、なさ……！い…ついた…っ、もう…、しません……っう、お漏らし、しない…からあ……っつ！ゆるして…っ、くだ、さ…あ、あああ……っ、ごめ…っなさい！ごめん
なさ……っああ……っつひっ、ああ……っつ、う、」

嗚咽と鞭の振動と痛苦と快感。

さまざまなものに少年の透き通った声が歪む。声変わりなどもっとずっと先であろうその声は喘ぐ度まるで少女のようにも聞こえる。

「誠意が足りねえな！もっとちゃんと詫びろ！！」

「ひ…！！ご、ごめんなさ……っ！！あつ、ご、めんなさいい……っつ！！ちゃんと、します…
…っ！もうお漏らし、しません……っつ！ゆるしてください……っ、ごめ、なさ…あああ……っう、あ、
あああ……っつ、おねが…あ……っ、しま……、ゆる…して…あああ……っつ、ああ」

主人は間断なく少年を打ち続けた。

少年の腰はもはや痛みと這い上がる快感に蝕まれ、主人の手に押さえつけられたままがくがくと痙攣していた。前はいつの間にかしっかりと芯と熱を持ち、先端から透明な液すら滲もうとしていた。

少年は必死になって耐えた。

また精を吐き出そうものならば、これ以上の折檻がきっと待ち受けている。

しかし躰は憎らしい程敏感に快感の波を拾い上げる。

日中妙な薬のせいで腹の奥にわだかまっていた熱がじわりじわりと少年を内側から苛んでいく。ぱん！！と一際大きく打たれた際、少年はどうとうその先端から透明な液を滴らせた。小さいながらもすっかり紅く立ち上がった雄茎をとめどなくそれは伝う。

主人の鞭の音がやんだ。

「お前……、お仕置きされながらまたお漏らししてるのか？」

少年の喉の奥でひゅっと息の通る音がした。